漢文文集

前編

一

ISSEIDO
東京 神田

半時庵先生著

淡三文集

前編

三冊

浦川富天
森林雪川 加頭書

摂坂陽 書舗 文貨堂 板行

序

玄之又玄衆妙之門淡之又淡衆味之主深有四楊以三楊一以德顯一以位彰名因賓之賓實堂不苟於名吾後三楊子淡之義先知之名也三楊子者誠諧雄也其原出於

貞翁ヨリ傳ヘ於晉子楊善ト永者ト
爲云ヲ而著俳文篇篇扶鄭
呑鈴鄭珠纓採毫吟涙刻意
貳ニ可ル謂巧矣ナリト可ル謂怪矣ナリト集成裁フ
序ヲ余ヤ不敏ナリ而ニ拙ニ述テ其ヲ見ヲ以
贈レ或ル曰ハ子ハ儒雅ノ士ナリ序ヲ能ハ乎カ曰
呼イヤ因ニ哉ヤ言也請ニ不ヤ云ハ乎ヲ義ヲ戲ニ譲ル
不ヲ爲ニ虞アシト昔ノ在ル三代ノ稽ヲ以ヲ戲ヲ余ハ九鼎ノ
象ヲ以ヲ戲ヲ鑄ル俳ヲ大禮器ノ彝ノ彝ノ具ノ
天自ニ天地之分ル氣ヲ茫々タル宇宙ニ
物ヲ事ヲ非ニ戲ニ也ル白ヲ而謂ル女ヲ楊ニ戲テ
黄土ニ搏ヲ爲ニ異ヲ人ト氏ニ無ル善ヲ以ハ上ヲ他ハ

者一大劇場也生化者大劇事也
夢物者生涯浮世也死生得失京
東榮枯者演劇也萬場歌謡雅
俗各有世之齎傳無士以扶國孔
口談之活高明標異以為得禍法
自我觀之抑亦惟戯必已無妄誦
之戯亦戯耳文字禅游戯三昧於
場々文庶尼於色觀
寛保辛酉星夕集滄和舟撰

州翁餘韻 春秋

序

物茂卿議和歌云。三十一字侏
離之言。不足道蓋東人而華其
技者。固一家云耳。而伯陽嘗語予
曰。山度湖傷楓林美則美矣。
不如我猿失矣紅葉無時人

易歳ゝ為愈也。伯陽善養生
綜性之蘊林。林品不出於今
為ゝ云やぬ。此可謂知言哉。夫
俳諧古國風ゝ一艘。降而為今
之俳諧。亦已尚矣。抱與人冥契。与
詞長。乃能穫俗于雅。採雅于俗。目

中無不可象ゝ景。心曲無不可説
之情。上一の以告
玉皇天将。亦一の以諭牙侍居兒。亦
一種仏法や。頑伝傍言中人。
以論已段令義を見ゝ不覺依
然而頷曰勝讀窮搭大詠詩

矣。就謂諸子道汙辱。三楊氏少
從東都寶晉子學諸。爲炼句。
去皮得骨。太學首領。齋。奇如天吳
九首卷潮。一ト噴。幻如緋士歌
黃黑縞黑巢。不見ヒ絶。鋭可一の
畏。如老衲搖人集。射倒塵中ノ

蓋。豔而一の怜。如雛妓携ヘ。枝迂
歌眼注。變態可出。左太遊原。
去諸寸哉。日晋子諸歌。海内爭
獲。又張屬諸。又不著。棋集ハ
于世惜乎人亡。巢存。寥ミ乎安淫
少矣。三楊氏克徳。志。無與至。

雖修文辭以自樂。英華精彩。亦
偕餘。昔宋大尉袁淵采文
章仕人。笑之。次而彰之。名曰俳諧
集。蓋文章而俳諧言也。京人
假女字写男揚之。徒然為之最。
而柔白集殿之。皆以原語枕艸為
藍本。而間色之未嘗少俳諧言
之也。晉与楊。則俳諧而文章焉
者非邪。予冠紘而佩史爺宣尼
而娘迦文。迺文。迺詩。乃詩餘。乃
俳亭。乃和歌。乃俳諧。性靈彼發。
莫不染指。此亦二子お偕社為金

蒙欠矣。今曾舍茲編成法晃。

因筆者云授之

寛保辛酉秋九月

赤松山人花毛屋士郎

福井藩藩校

世度之事ニツ筆ニ序跋二ツ進ル法正筆不筆ガ序ル平仮名ノ事

一祇園ニ文章ト平ヲ八格ヲ和文章ト平ヲ又一筋ニ云ル所先ニ仮名ノ事ヲ仮名実ハ礼ハ実ハ孫礼ハ実ハ孫ニ仮名ト仮名ノ事ヲ叙祇園跋神ト平ヲ皆三遺記ヲ見テ仮名ノ作ル也

一祇園ノ事ヲ集メル板ノ一書ヲ見テ不解安ニ系ニ遺記ニ教ヲ為ル為ニ家伝秘訣ヲ書ル事

永徳ニ不苦ル所級弱矣ル人ル

一御筆ニ和歌ハ俳ニ字又季吟増山の井四季の歌
俳ニ字ハ定又流の事ニ有ハ不可絶歟
一発句ハ始百韻ニ席ハ概青葉ハ後後準的侘ニ
ハ和歌風流減ニ成ニ此数十年ニ成ル十年ニ成
是ハ先師ニ付ハ素香而已ハ其ニ実ヘハ数十年ニハ
今日ニ成リ申ハ俳諧清長ス事ニ成リ今羅人附ハ新
ニ成ニ立ツニ成リ席数ニ選ニ成ニ参ル事ハ成ニ成ニ
一世ニ極ル事ハ門下ニ祖家ニ成ル事ハ
ニ成ル事ハ成ル
一源氏ニ成ニ成句ハ一句ニ

住境ニ不接ル事ニ成ル事ハ成ル
一師匠ニ成ル事ニ成ル
去ル事ハ貴子必上ニ成ル事ハ一座人ニ千ニ貴
子諸ニ成ル四又人ニ成ヘ下ニ成ル成ル上ニ有ニ
有リ先ハ為ニ盗跖桁下恵ニ成ニ肉刑ニ成ル
ハ性ハ成ヘ上ニ成ル貴ハ成ル下ニ成ル多ク成ル
六ヶ条ハ成ル

返事　上下略

是ハ有テ学ニ成ル非「ヲ」競馬ニ成ル尋ル原ハ答ル

流俗文字を月雪花などしてなほ古
ちゝ抽男和文字といふあり抽俗祇とちゝめ書
り幸之遺跡正不拙ゝ字和漢仏法きゝ不能の
不如ハ小俗呼てきびしきゝなを見ハ強きゝ
ごんゝゝ云去男流俗ゝ云事多ふもゝ人の云
事之過て強るふ悪るすなこれゝ云俗ゝ年書ゝ
奴僕も云なゝハ口癖のやゝふ只のたゝ人言をいふ
俗流俗文字ゝ云ふハむさと俗語をつゝふゝ不ゝ能ハ
彼方裏を面白たゝごんゝゝ人ゝ流の字ハ人偏ハ
書くひあるへし俳の字を書く俳諧ゝ不知ハ見ハ

けなくゝと書ハ初ゝ古物事也法傘の外能ハ
屋ゝ書ゝゝ又塔山の井の書ハ俳乃字ハ書ハ要ゝ
書ゝ書ゝ云書之又ハ青ゝ債ハ書俗語ハ又人偏
言偏書ゝ書終ゝ不能ハ中無ゝ云書の
孤字を費ゝハ書ハ中無ゝ云書の
中ハ人ハ流霊を不完ゝて流川の流ゝ論ゝ八雲抽ゝ
歌目も偏ハ書誤ゝ書不書ハ書ハ又ハ書ハ書ハ書ハ
出ゝハ不言成教ゝ云四ゝ

かゝ抽ふゝむ書てむうふ花の新
流俗ふハゝゝれ書体書句ゝ書関ふハ

清くきへ　紙

武蔵文を蔡襄の法自家流に倣りて今に亦指南

又

海ちとふんるとりたるあしもつみへし今の紙背

の句をかくもかへしへ紙の句をして倣りて

殺句ハ林久君也御紙を　中院内府公清涼殿にあされ

詠ふ岳四家の風雅の紙摘なるへし　太安万呂来の四書

お出へし　其角没テ後紙背裏廃ヤ手ラよし　文字係

の人なるへし風風不ヲ我ヒ為ても寒號虫のなく倣て紙

道の黒白をつるすあるハしらるふたるす菊ふよるとかし稲

屑をハ馬あるとと定るるくひなるん茎可笑十指十月史

云紙ハ新久ふ吐て一筆くの事不来内ヒ志ても信機略可の

事皆是て海ふふの家ム

師匠てもなきをなとと云る時代遠ひ教多ひり紙も先

ホを踏藩の俗更て ム 極立を為ふ句ふるこの事とこ川

うるるくるるへしさすら風雅の道ふ名実を筋ふく筋

ひしくるこのみて呵責ホを及ヒて合佛世間祥天

麿といひもしるる日蓮ハ師匠ふを上ふる

原氏を句ふるて用ふ

かゝるものゝみたいひ出すこゝろをかくのゝ
ゝ心のゝゝゝものゝ句みゝいやゝゝものゝ句ゝ文章ふ
行雲のゝ流馬ふ力をゝゝ源氏ふ敷多ゝ
出雲もこれゝゝゝ文章ハ源氏ふゝゝでハ天竺文章
ゝゝへゝ用ゝゝ拵ゝ行ゝ加いつゝゝゝどめゝ拵ゝ
ゝゝゝゝ拵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いやふ安へゝ拵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文章ゝゝへゝさゝゝ法ハふ拵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて言葉ゝ補ひ作ゝ書ゝ雲人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文章に手ゝゝよゝゝ一字ゝゝふ以色ゝ引ゝゝゝてふゝゝ

ゝゝへゝゝ又朽ゝくゝゝ拵ゝ文章ふ後ふ古れを不斉
ゝて一流のゝゝふ一冊ゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
去冊後ふ後ふ変ゝ日ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふ去のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝふ会遍ふ手ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
去の身体家の家ゝゝゝゝふ入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の陸奥国古来寒くて雪山と名ゆ

石と石也意有如何望事間不容髮咲

相用事武士と甲冑山伏と兜巾

ものさけて麻のとゆをついとちゆると千

世界九千八海　　馬子判

雲雨雲山の極意海ゆ

洛下文集巻第一

目録

一　仮のこと葉
二　相仮を附す序
三　歩蓑の説
四　堀西北坡小船説ふ
五　雑話盗人と禪
六　玄彼州
七　楚八四日経渡
八　東賀へおくる

九　惠南律師稀年賀
十　若日荀茂編一人を酬ふ
十一　琵琶湖
十二　雜話六章
十三　積皋禪を彷徨
十四　陸琳旅宿に彷る文
十五　紀陽の樹亭に於ふ
十六　竿状を送るる序
十七　病卧并呪賣
十八　富天りおく示教

第一　飯乃辞

眼ふ憂し耳をうるふ事。皋うこあのし　喉吻茂
ろ支。茶ふ炙ろ酒ふ蓮ふ。やろ切くきすの衣
毎茂墓ひ。初音紫舟押わのわて。ずくとくひ好
むと名つけ玉品を重し。今古風流ろ境ふ之
（ワチカ）
驟七亭八大津ノ角上也　皇ろんを書ふ境却。寔ふ瞬ヒ亭の地
從来飯を炊くして至て好ず。さわと百費茂
百費ノ芋以徒拙州　芋かしら茂吟重し。ろるハ。独うろふさ服うち
多く茂を炊ろ。ひろ。ひろ。ハ的く物く言尚
ふしく異なり。此多し至て精く聖乃事集

ふもけひ。味ひハ器へハ菓子ある人れ言ふイみん
あてかる穀の言ふ。ちゝふなる二ツ三ツ作らうして切ち
くゝた後ち。ゑゝうち地神ち添へ。ちかくとみつ
うゝ育して静ふ走り自ちさすり。又粒メて山を
うふ咲るふ笑し。高安の女も出めしふ飯ヒとゝた
さたのふ人々ちのふ。ちまきや。器物うゝす凝こら
きて。いひり山のやさ橘。飯顆山ひの夜雪嵐ふ
居士八四休
居士也
ゑゝとし。四季ちの野菜ち煮て居ちゝ孫ち
うゝ歩ち家セ作ゝハ。粒ちる体して体ち。嗟めと
ちゝものを知ゝぬ人ち多し。一椀さハやゝふ二椀ち許

の法うまを排ひ。三椀嵐のさゝをとゞめ。一白たち
まちぬゝふまちん。ふやし。ちきち飯うちと。蔵
を仰ち地をゝゝ千とせ城睡る。驟ヒ
州雲ふ抜ん人ハ。齢八十八乃月ち稲ち
す。家信今ん。いうあゝしくさとの茶をちゝん
示しをス
坐田ハ良茶
生ル地也
文りもこのゝく稲の香源ゝゝ
半日抜ひ乃ち家廬ふ。てたゝわゝく述く
美ニ抜飯を謝ゝ茶
大君風雅ふ茶。言淡く月ち田毎れ新をむゝ。

清別業の花乃春ハ草ふ交え。香れ於ひ奥
の行ゑひらの葉ふ浄らあり。息くのあらとを
くして近し。遠きハ光悦翁のへうて静なる秋津
嶋稲乃あらハしとそ。此日いつ成日於ゝ。氣竹庵
ふ惠みあふ言の三ツ。云む畫中ふ香瑞含
雲花ハ茶ノ一名
み宇治の橋姫ゟしなく袖を震ひ。青苔日
ふ清して立田於暖を奪ふ。土りて古まやうな
承れ身つうらみ川うらの住さまひるよし。
清くむみれとしたらけふ珍やし。一ツハ
甲處きハ土日押う浄せて。唐う然極くと

有さぬけなく。緑なるの波を織えて夕風をさ
きそて。名古曽れさらうも今なり夜ふなり
あさ。雨の跡のきえだらけるふそ。様なり声
と号て佳賓を親をとゝきかさなき極のし。今
一ツハ声うきそふれ良功もうなち。静なるより
ふ風乳のふりりておとう倒しく。誰元氣歩の梅
せいえんや去乃秋葉れ白ひ色ふなられハ勝語
取とアりへり。極くさふあく。袖ハ秋のまま甚於雪。
炉火ふ乳身いとま遊しらそ侍る

第三　愛蓴説

愛蓮ハ愛蓮ヲ對スル語也

水の州陸の草をあふる中に世人ハ花の富貴なるを
まて推ひて。唐此名をあげ牡丹を風流なといふ
世のあはれをあ刻て樓臺飛せる。菜好む人のもてはし
くも思ハんずる枝あるに香風の遠きなんハ清し。芽子(ヌナハ)菜
ら泥より出て。小余堤の朝日にハたゞならず。夕陽に乱
れ。君子をも称くあはれものとなりて。亭ゝ菜亭乃
菜に誇りて。盃の数一盃紫茶

志ゆんさいの中路くハ首気ありつ

加る横川のそうよまうく 上略 某氏ノ歌

おもうにすゞまるおきのこも。横川路たくに月哉や
と。此こまの窗のさゞらにそむく。凖もいづくハ知なき

菜のさかな。初鴨を不待暁への彼を轉すも亦もへあり

廿四 城西の坡で舟を泛ふ

日成於桃花いきんして頭をなし。柳絲(ヨキムロ)に吹
て水波静なり名ぞ。流に任を舟を泛れハ樓
侵って風にかこ語ひ槳(カヂ)に落きたり。天清く蒼
し。病翁三子に従ひ行不を放(ホシイマヽ)ふして。酔にあり
ひ芦のいなを捜し。仰く星と飛くゆく袖をかれ
すも。随えゝ銃る波よけ山にいる。その志をうるさ
けして倩(ツラツラ)おもふに。禹の神をおもて萬人の瘠

廣英ニ柏 文章の君 後ヲ以学ヒ

を揺し。廣爰ならしハの枝を並へてよくしもを注

うふ。皆功の名ハ山ちりも重くなす業ハ毒ふを
ひも拓し。ぱ山拓頂ふ大拓へと毎さ名言し。
千れおむさひうあ出る帆を遠りぢとり皆厚
卯のむれ白ひを配ま。孤峯要と成て彼の厚
をさむ。国ま一世ま功ぢり。志ふも今安ク生
やお日やきのためあくみぢうねハ生く家栽
佛ふ平てトれれぎねひいと毎ふし志し法
度の国くれ者を積ふ船をふ以彩ふ。
新くの市志ふく白く深ま志く画て布栽載
竹ふちさみ。ちうし林ロうち治世れ風流を

吹し。日ふ鳴ロりをちみ。衣をうちへてそなれ
ちの價の物きを切ぐちふ。川口ロいきはひ。
大江田子のく名ハ行きて百家今茶家の物
ひ。三笠れ山子出し日うもれちま行り
ちふ乃とらいへ保津ふハ法ちへくんや。塔り
多武と拓れうみ保元祥ぢさハのむひし
とうや。宮ふいい物うきちれし小舟。あやし
く解を左ふとりてちふへきめれ風情。
花橋のむうしめきておうしくうちふ
あん。婆婆ふ物ちと。爲色のきねふくか

しら絹ぬきみ。絡き絹をまきひ。筆に墨ふ
おしをひ筆に墨ふ染入筆を墨を出て、机を掠
め舟ふ乗ふ。さざなみ。袖うと。孤棹乃
東より西すなりもなやーー嗚呼何人ぞ。嘻々
吾兄茂志まりぬの孫ぬる法妻ふ乃ひさは
やちきりを張ふ又川舟のうれやまもざめを
せかれつるかくおすすめるるしと。渠をくち
忠やひん孝やハあをなむ。敢てれとしめんや。
ちくく病ふ日ふ益おさ成ちるみぬりふ
うつうつこふ愁て。悄ー然として恐しくて。

垂尺 比五尺也

吹面不寒 楊柳風

蓋を撰みーーてまおろのふ一唱のちさおきを去て
虎丸柳汝よ濤まをやれ乃花
ちふ法海一千里ふ潮ちくれのうう尺を成て
蛤ハ小貝のちあふ樓をやゆ。法裏法ふんをやや。
酒をくみ魚ふ青を投うち。巷法ひ吹て
に乃ちをちむ。裏日乃ちる。天きくくしくち
法の新八武蔵山を新しふ法寄。法よのれハ
冨の花法て為て扁舟帰城の光ちーーを
時甲辰三月三日

第五　雜話　盗人の巻

彼卓を覆る酒家多し。或は械来て窃を
行ふ義を張て酒義を造へ入れ家を覆る臭
性ふ者は木枕くを握る風を
隠あるを伺ひ身でへその上ひざ〻く盗人幸
ふ枕をうつくおとふさ面おのそうき世のて
令れとも吹れたる〻く芸に伏碎とかりて生
所なく柄枕を枕て熟睡しうり宮下とる
日ふ弱るき芸てて義より四を覗き見被八大毒
不ふ健形るあ〻男二十余人勧めしを打てひ

酒桶司せ

張ふうれ〻盗人出んとすまとも道本しも称
だ法ふて桶司とも義ふ来るへし命を一寸ば
形しいうやいうふと立支を尊一御くんを定め
芸縄をふたち毒ふてまころの九を捜しも
しく腰ふさし尻をあるれ張りこうけて義の戸
をぐ〻くぐ〻て遠意本く打ゆる九食
食あ〻び張る大芸の家を口さ用もやすき一
文字て大まを仕てよいく〻忘いく〻と考
をあ〻くふこのけて振ひてもる男とも行をつぐ
これハ何ンじゃなんぢ是ぞをつたをと見るだら

[illegible]盜人かも用ひすてられぬ[illegible]
世乃計靜[illegible]中戸を振りいで詩を
[illegible]る此時に一会信玄の志なる
世盜人乃丈夫を必をとらん

八角ノ磨盤禪語也

中山ノ君ハ一杯の羊羹を三を家内ハ食
[illegible]入る盜人を三を半あるとられ法藝
紙念窮而可住境あると首吟淡く贅之

戦國集

亡国タルハ司馬子期也

再斯可之支子季文子云語

第六　真岐艸

再斯可也とハ日く人のうへの宝成へ。一句を結ぶ

[illegible]入る山のうち月の家より咲出る
の俤四[illegible]つつ詩るの風色わらん。元文[illegible]の秋た
しめれ法要よしを結ぶ。虫聲嗅洞あり杜府る
[illegible]しく久しく神ことやまりて例
有法者を辞[illegible]名菓さうへ酒をむをし
古を冬一新意を借をぐるう云[illegible]ハ
腹菓を解ん甚白句ハ

故ハ絶く波を拾を菓乃身

世の波乃うを[illegible]を拾りて花ゑ紙をあ[illegible]菓に
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]九日[illegible]
[illegible]

訟多

未見内自訟者也

但去の作詠あり

冨士の畑
西行あり
五文字也
仍以下五文字
をととて云より(?)
此とを無ゑあり
筆力の余情
あり

に見てこそ句形は似かよしやと尋ねよりれ。予云
不可也。此日の句ハ菊の月と云より人も称平な(?)
あり。世其下五文字を家にゆづりよれてく十三
夜の月にいひよせ。菓の字を以句ひ世にふるなん。
後の月に菊也月とを結ひ合一句。往昔より(?)
つ。蕉翁にあれば。ちとよくこそ形さハ　冨士の畑の
何某ことかきりありしと尸出(?)其ハ。名く奥に入ぬ
見て諸句ことにいつ作配あるや。これをむきては杜府
來て凡達に眠られ。ゆへに向をめくり。猶前ある十三
日影　後有る菓は自夜哉と。土葉大方に熟して

菊有真味
欲弁已忘
言陶渕明
句

九夜十日

九夜日よハ
十日新治
範使之(?)
連歌

五文字にもれしむ。昔ニして一指ニ痛し。いきみ便ニ二指
にのりぬ。ここうらのつ何こそ三思にしらり世。今时
連俳の場。六十一翁去て見て開きり。世人ハ六連歌ぬ
別とは五句の上にして軽なる論なるす。真味風流く
ハしく欲ン辨ト。已忘言ヲ神を得て古語に学よりて。
五文字残画深りとも。誹諧の句後進にあられ。
静におもふりしくハ是非の達人有て。十三夜に菊を
むすひて一句残形さハ天下残吾を識んと
九ノ夜十ヲ日の前を云下にして一句を捨て用捨
残的当にあらんれ。今十三夜ハいのふくとなり貴

らまたもおこしもおろさうりの幸は十四夜到る

照りつるかの子あれ和歌の心なり

清宗三秋は伴をはらひて　照りつるかげいとりく

おもしろし。香きく拙なりして笑坐如花人と因み孤

謝云自有東山妓金屏笑坐如花人　李白

しまのなかをくまなく遊び寄書　あそびどもの

あそびもとえうみをはらひの云ちなく

佐古れ宴と云ようして

ほとゝまいまるも。上達アとさこゆ　孤と。ひのやうみこと

古社まし寺おるハ。先とゝあまふへうり。光元はうと

ほしうけいせいとも小月もかりさ夏のたとも不寄うち

はれ

民の酒の友のき　「中こことうれそをこの那を

きもちもの

ちの山をこの月をいうく人めも侘ぬやすみよしのそ酒をて拙てひう

ちうもの人もてを吹れ

名好

人くふ一句を孤物うぬと

小弁ようせたる奇之比

時名好六十

一日名未決

小弁ハ伊賀

国橘成忠

娘中宮く

小弁里居の

時放蕩のれ

ものむ記あり

古人こ秋きくれ一夜て秋乃月

歌の名通家の孝言歌の知方輔仁親王十三夜の月をは

ふと毎十四夜の居光を今文ふうと

小弁里居の頃りの日皇都山拓秋の

例の紅ハしく秋くし至第ふ頃りの日皇都山拓秋の

ようもれをと昌廸十三夜乃句とく角申

浪なしと菊不寄やの夜すの月

清ふおくろき字ふ奇物うもちくく胸をこの月ひ

うよかろくと神をを志先は速紙の境今日家れ山不

ふあくまうけへ至の時絶唱佳作を字くるる北野の神の

伊予の秋を　伊教ともおもひふまる紙の秋をて拙うれ光

秋をこの

梅原のれも
ひろしてまあ
なをらん
今年集る
八幡の光清ら
奇
とたらひ伝る。甚又の書不十さ事ら八月十五夜石山
歩行て至
幸ま
又れ
ゆけ
おもしろき
秋と云ふ
源氏の間ふて戸出る原
死ぬる明日の月に自然ふ
と云句を花のもとも梅嶺よりも桜寺と
本の月ら
次ての事の
引奇
あらるるるる月の自の紅葉
心はるの秋ハきよ幸
去の奇ふて一句とのひ幸んらし。源氏の間にて
茶事ハいのしるさ事ふ山桜度も弱れ
事原とそお書事ふ白斗きて月ら桜寺原
きえるるるよりて奇矣の人形ら事ら。次广の巻ふ源
そこし事幸桜と書ら八この奇ふ五ふ月ら世まと
式部一名乃子
云初後ち家
女ち年係ふ
ちら
「乃子ハいのある神形ら人感原も形ちけも源
和ふも流ふ月ら式ふ。昔今の人の人ら
自ら月ら式支も形ら人し。去死形ん「花ふ
孫ら人ハむのとふて去死ん事のさ式の至月の比二月十廿死ら矣と西形の彩
式奇ら事ふ月桜と上ハ桜佛去のみハたらと紅去と形ら
ら人ら人ハむのと昌迦とあり去死と云句引出しらるの後年文事の
いひ矣き
乃ら改へき。碧原金波三五初式夜清明玉ふ如孫ら人ハ月乃
と常ふ作の夜伝アリ仍出ら
碧原金波　本れとふ死ち世ら去て生涯のかあるらめと。本の月の間
三五初八月十五
夜陪亭ふ
院作ら
菅淳茂
碧原ノ句ハ
起句玉不如
結句七言律中略也
桜ふ後曲流俳諧連篇序題ら。俳諧の宗匠ま時庵

篇序弘曲流八家隆吉要と云き吉と云山五字當時泚沒ヨリ日く有へ
他ハ不知也

時元文吉九月仲旬

第七　楚八集四日經版

元文時居古今序叙を乃拂ハ其文字不成中旬に甚も孤業
元文ハ敬語　ふ古人風雅に接拂乃や有下元食に客ハ以武為中居

紹巴ハ一汁三菜上さ拂ハ称名院殿紹巴ハ元食の事形りとて
戴恩記出　広中るしなれるもあるとて是れ元食
きりのくも無成へしあふ寺ハ三房ニ上ハ
元食ノ字　元食ハ是ハあるうく元結て紀に去元食
同ク宮今
其名序

末時庵

第八　東賀へ旅る

繋月繋
日　文選

海辺かるの栗を拾ふて焼て食ふ月を繋
日我繋きて来ぬよ来ぬ。老愚畫翁。はよあ
ふ。室橋よりの亭ニ似たる。図あるこの

周五覺

日高丈立清
風生
各序　今語

ゆく吟へ一日高き事丈立なれとも。あるし睡く新
濃ふ也。栗皮門を和ふ分嘆し。お腹おるこ。として信風
を生して去

第九　惠南律師　稀年ふ賀

ふ詩はふ我作の法元を誓りつる
久しくけふ元ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。と

仏法の古えとなりひとふれうる法よ聖なる言乃
葉ふも世下ふて。ちきりの日葉れ枝ゆゑ遠り繁し
ゆゑし月。むは常めの世俗さうれ家はかゑ屋ふ
うつしてそとてたちるを。閑一物しれ志とも。諫ふ
短文をみるうゑ世くらけ引世多人や。ゑとの道
を欲ゑ不思名利ものし弱ふ恵俗呼の壽求。
はとし八九の春秋二つ斗も。そらしてもゑる屋きを
をみちの朝夕。ゑやまをの白ひをゑうちれをひて。
れのはゑうの高徳。頭りれるゑを。人愚人ちをひ。人
徒人ちゑ。人ちるけふく。仏平法事てる

五文字
常云ゑ
古語

矩を諭を城ゑや法の花衣
ゆをアちる一雨人。歳をか来る時ゑ屋ゑ屋て。
四季の老人事は尾古れ我呈ス

廿十　春日箇我初ひし人乃ゑを人例ふ

発端恐ノ
字ハ北山法皇
ヨリ箇ト聖
老ヲ女三へ
ゆゑ世ゑ
を元ル歌

世ゑ日へ世ゑ原ハ忘し名ゆゑ毎。北山ゑる寺我うを世ゑ
うれゑ伝ゑ人の林ゑりゑるゑうゑかとて。五六年六
七年箇我ちの枯さ原ひ。我ゑハ法ひかうう
志法うゑ。塚出せ我ゑた古ゑかゑ。ゆしくゑ
法ゑ我ゑうゑて。我我魁ゑるゆうゑ毎。ゑ原
年経ゑ毎ゑる斗。ゑうく春雷のひき法ゑし

龍筍ノ一名象牙トモ云

いろをとこ竹名物語

抜もぎ、ゆさぶるやかくもいろをし竹くの牙
おなへ縛綱乃襟紙はうね。或ハ鞆人の簑を倒
しまたき松しさ風振ひ。穂先き竹皆ひハ乱て
のふるふく繁紙奪ふ乃いろひの。所てハ紙う
之きは角う。竹枯しかりれるく。おみなほ
至り走り寄りて。さやゆ。ひうちうへぶされ去せ
めと。浸さしくくと引放てハぶくあやしけは光
星。いの成姫を生出んと思ふ不。世下ふ行ん
とんひう星。いさるとるふあうへんとして不。
とと切敷しくあちふ約瓶と名つけ。ふりて繁

馬蝶笛ヲ能ク吹

蝶を水紙うり。きちち不汲とう。紙をあへ
まううけれむう。ぶけれるのたるまうも今とう
はらなしや。ぶさらしく刻うハはあるをてぬき
しられハ。沖中川乃ひ細きね紙浮ふ。を不引
蝶をして七孔をあへを紙吹しめハ。浸紙を葉
ハ音ふ鳴りさうく。岸の枯葱ヤを拾へ。ちを。
精列お松ハ的ハ。裏れ目絶く状表ハ又的やをうん。
清うく考姫よかハ。はきううさ紙をうあにく
ふふも。信ふを結ひ中ふ教ひるうはやいて部君
のおいうれをを結して。寳ち浮ふて中く

竹胎
竹ノ皮ヘ

うめうれうまで。竹胎の風流ならんやと陸士乃歌不
用人法て弧ならぬまて謝ス

廿二 張邑湖

張邑あり膝平扇て彈る人なし。柱を斜北
うた波ふ如ならた。柱の名を撥田れ橋と云
四絃一筋九十日。弱法ふ日れあけほのまて還る。樹
四絃一筋九十日
四本子ヲ四絃
ヲ擬ヘタリ

動れ草照る。氷筍ならぬ日華三月畫ヲ彩ヲ濃
を孫た。雪も氷も雪れ春法巻ふさたる。梅ち
任俠
男伊達ヘ

枝いち先しく。任俠れ詩ひ倩。たのうまて北不南ふ

肘を法る。乃春れ新場ならぬ怯れを梵字れ脯ならぬ
らぬき。風を結ず。かうち芳ナリ拍云彩りて春吹キ。桃李の
ダマリモノ
桃李不言

だまりの花雪る。春の国れ香。人ならぬ投る。かさうう不
美女あり。姫ふあうた采女あうされて盃をうる。
眉ならぬ展風流愛すへし。獨ねくまうう光れる髮
れたうう尾法く。ねりとうたるまあうれ春うる。六面
子光梅ノ一名
うう来ゆせうう。独揺きていとたうく。子光のん
九日ヲ云ヨ長能カヲヲヲ
れなうあくて。胡ヲ春
不春直。卯の花ゆ云の夢ならぬ。春法の様
をうう芽れ輪乃ゆく波秋風不皆る。桃蕊萩な

楓葉荻花
三両声曲
張巴行
楽天

時に紙燭を点ぜり。三両声の曲をなさんとする風心ありて笑
はせたり。雲雨うせて年月枝の空に印して曉れなんや
の色四時則絃となり撥絃結なるべし。張巴の大サ蜀山乃
かみよ余れをこしに紅をめぐり潸々たる六十余里の
雲雨行ふ猿もなる人。矢百人三百六十度。雖
も此張巴を採る浮ん。首弾しる人あり。絃をも
書付ける姫。為宣孝ら書。上東門院女房。筆紙つる称
文法曲流
て撥そし。湘上紙抱て寄りくるくる
いつまでの
相壺発場
いつまでも此時みち女御更衣のあまたさぶらひ給ひ
と廣紙乱して言く一ツ二ツをおなておほし

百年三万
六千日
李白

おかしくれ
竹川ノ考ノ話
くるくる人
石山蟹書記

それ名もくもどろくひ風きたる。後へおろる人音をもて
て。石上光有水清く江平満。花を山張るみちう。弾し
納めて雲の袋小張し。雨の糸うてよくメくりくる月
見紙撥ひ。不二山のうへ去り如

十二　雜話　六章

一背去光人くの御家のは。白雲くの山破月中ふる
小車を或大家より御和契れむり給ら給ふ
くる。破月くの極山八御家慶して後ちの和ありて打く
きくもし又八切足斗拍結ち有り。徹よ地震た文太武
の安えちく常平和安れ道我好を張ひそのうへ

朝ちに初の
氷極ちうて
雲よ去の上
ちて陸き

主席門内大臣
山斎めさ給
歌へ

ものは道筋の法なく。古人の工夫我心上よりなしへ和漢の
珠玉をひろひ集の道理明きらめ人も物も世をも鄙ふ
非の筆書よりなり給ふ。奇こそ拙まとありて口と
らせたまふ。或拙なりめて雪ふりうれを歌の詞る我
作うるひて。ぜん考あるましかとおこひ法くけてと
ものまあり

ものさはまたはハ中一面我れ行きをうて
あとうにつけ雪ふうなしさ

御名家を忠平とうを京洛中古文年前の自
又あるを拙なしらふ歌をりふ乃自

とうかうり時ふあふうふ。鄙君内府公れ御門第とあり
給ふより三の一橋表れ一間をよかく屋をたなをなま
りたる。の修寺風の吉水の秀みつうう月ふを入井
れおこひうて。御師師範への問答多の仮八千里一置
蒙成我能を中以も其枝ををふの法ふあ上。
なるくよりくら給古ひくてうれ。み勢めたまふを堂
とれはうらく家れ貸常なうは武門ふは先つりき
ふをもうを三ふ先我宝てむう今あうなをかを
らひたまて実くも稀あるれうて以うへ先こや
の山乃幸れ下張あ生かうるあをうなうとを

分教まゝめ給ひもみよ。玉は海神の玉なれば海
うゝに也。内府公をもちふ責たまへるもおもあんく
なる御答も年をゝくるゝ。時の時まゝ加護
不ゆあゝくんへのゝを祭ふ神祇の仰りく深る日数
をんう。たゝくおとむきも使ふさふ奏聞深く
と御ゆゝあゝて分みつゝまゝあ法先祈まて
祈ーゝ数まゝまゝと寿の数く御なよれし
たまゝんう。天様ちんくしく海とふ奇特の
りのねみてを有るまさ白墨の白ひとたよて
の水ゝきまは常の外よまゝふハ数まへまかんや

と院宣ゆゝ色ゝれハ内府公みも義と答なゝに肩
をくおは事おくして和歌の供をふうあんちん
みまゝ山まゝき聚くてうゝひたまへゝのゝ山な
く御歌有ゝ筆の紙のひ文まれ姿をおゝても
うゝりあゝ。歌ハ世宣ゆりゝれまゝ世
ゝゝハしゝれゝも法くみかゝて内府公ゝ野君
へあゝの中作入ゝまゝれハゝゝゝみもあゝて
くくあゝかゝ有うゝたゝまと法く伝ゝ年代
積ゝ日代抜ゝ日み弃まて詠奇し伝ゝ事の法
下なゝまゝ。奇道の言き事今経お記ゝ事

歌よむ筆とあそこうふちて秀うる一ふそ之
疑ひ諸よいひ出屋寄御恵之なりと戸拾ひ
しとやんのれおそもけそ寄人の考な原和
なるへしをなれあくをのやもかうぞ久した
繋古名人上那の外せるあるすしたるやとた
そひまふけるふ新八とそうハ余りなるのう
そ琴弦振りそるとを笑読なるう
一路五常よ坊をそもふ空姫のきやう成口せそ
財四角よ見るよ割て四面れ割屑そそうふ坊を
も配當之ける事常なり。或を形象のわく性か

改本られそと作うを之れた一大事の御用そあ
と御次ふ五四角平割ふ四面のうう屑微塵も数
らそを割ふる本の例よ家をふく御前へ出寄れた
御横姫を振してぷふうく加れそさのむされた仕方
みそ作ふいたくも坊をとるう刻ふ指ふるかや
うの茶茶をくふそれあり艶おきおこの
そのなう。坊をもかふく上割をせそある所例の
大ふく割屑紙配帝しそうたれ本そうふ成
ふそとふれハ先そそふ作あそ暫思惟したふし。船
の人成ふしてかくれそふ遠ふ支八と尋給ひふれ

え。伽医者アクタレハ坊を庶ハ屑我包是を次くの
御用をなをへたるの設方あんぢ彩系を律義
ものいふを屑を見むと俳事お次御用のなかまを引ら
さるとアホ。笑を分たまひ。彩系我先て坊をる
ハ屑我盗むまをあるんぢ古人も竊(セツ)者と書を俗
責るふ不及ハあるちと御様姪おるたら
ろ切りるとを。御奇の道いうをは功をちん
とおをひ作る
一郎兵を源香阿弥動ろ屑絵我ぬ一絵ひ御
用をくを仕るぬとを。を阿弥武阿東師を法

ちあり玉武の御様ちうまんる者ぬて人情の言
俗をを表せをとをるを姪一所人年でを家様の
言情者と世人ををやし家も御うを姪(イタリ)信号者と
教夕奪至ろり。又我大和御立園の時ハ世ろ御心平
けひ御ものあり如。屑阿御自婚のはをのをふく
孤我を作分第のるやう花を我自ひを屑絵我中ふ
れちの山並川の俳心へをえなる第れ彩うひ。御様姪
彫りふをくれをく。動ちををめ一山さををの方今ちく
名人を世を参ちる人くおををれ威んのるなり性
御姪弟我ろり言外字法うを姪ようを御意有加

くおもひもて。動もすれば御家臣ふむこうひ。唯今
の御定生く世であうくく霜ふ神ふ雪ふてをあ
やふふてをれ。まりは見ふまくく私欲も常く御
家くをハ色取踏ふまくくをくくを文花の度様他
此家をは格ふ不ふ高慢ふまりて此度ふ御用も神以
利益ふかりをれ。中略御道具ふまり作松ふと一番く
ふ魂成ふある也ふ御一陣へ中る付所ふ御新文高様
奥へ入ふ世ふたふひ御家臣をためし。唯ふを方、動もす
ふ中ふる一言まふふ取ふ条。唯今ふ入成ふ也へ
一領ふへも入ふ臣ふれふ後ふ中後ふへ一ふの御ふる也

御家臣ふ仕ふふたおふく作下ふれふ語ふ長ふいふれ
ふふふ中ふふふ也ふれハふ方ふ作ふとは少ふふふく一ふ
也寧盗ふ成おくふ臣ふ成第ハいの外の價ふて中付
ふふて役人ふ吾ふ字ふふふふの御ふ中伝ふ一倍を
ふへ一黄金成ふふふふ必一倍動もふをし作ふへ
さ形ふて去打角ふまふ中ふふふる拘ふ捨ふ道具ふふ
ふす。崇ふハ大名ふ成まりて益を貪ふて民ふ後世と
ふふへ一。そのふへ始ふふれふ用ふる方ふふ主ふ家ふ
臣ふ一御家の形成ふ細工ふふ神ふ利益ふはかふふ
如ふ拵ふ成ふふふいひ作ふふ益ふきふ伝ふハ有ふ

何て渠ホう世益の理我あ〳〵へ例ホ至事きくな
くゝれふむむさくて法うふるかし。世度乃仮第ホ
てこ年たうりく他のる形くて後世殺りなくアて
てきる被ホし拙好も無有へ。なくさみくもんよ
うゝん利欲殊外と云道具を尽ふなゝゝ比非系
の一言を以て仏入我とあよとアなると我仏ゝも
る。勤たつすこく京へ帰りんを法ゆり魂我刺(サス)たり
のおをひかを是とを非かく。形波跡仏へまつり紛て代
時て所人の言語とおとひまふるハ仏のやくふゝね
る当下果るる中ふていひちたとひかちなり。どこく

生活筋目市宮をつゝたるものハなゝ元師君ハ貴人
の貴なるものく法事形ゝかく斗れ衣面とたとふ赤
面と云も中と懲ちて我を恥とたとゝをゝを額ホ
汗をもるんなる。何ら御ハ入ゆゝてを因外不当と邪
波へ形ゝ。三またうり経く跡先御殺先我ゆてものゝ
ゝく動ゝ法ホ入中ゝる形跡ハ源氏物ゝ師君
へ御ホ仏中ゝる形て表話ゝゝる。源氏物ゝと表話有ハ
中ゝ宮て我不我仏跡仏なゝゝア作ゝゝると味し
ゝと宮作る中そのゝと暫くためゝひ志のどもちゝゝと
なくやみゝ。同しくゝを跡仏源氏物ゝなる史不宮の

不成次なる清話もあれうしさゆゑに白氏文集

ものゝうハ常平仁うけきたるもの也○文つゝ不

おゝちておとひうけおきさいたいやりもるもあし

ゝもおほうしなるゝいたゝへゝふぎゝくしたる不

ゝ能へきなるりやてゝゝひ作ふ藤とハの以

たんやうよんえ仁作ゝゝゝとて中ゐふくむた

たゝ未ゝ不定

然限ゝて其人の怒りハやゝあ安かゝへゝ況や風雅の

君也ゝ毫ゝ也

一白居易ハ子をさ仁て梅ゐ孫る茶藤ゝゝむと

諷ゝより白氏文集仁藤法をて見作りゝる不作る

ゝも和しいのあり久義ゝ不ふ有茶やゝんい梅の

一今生稚て行藤法ふゝもゝハ為好并謡乃作者と不

ゝハ嬰児ゝも常平口すきむ事あり以和上曰り法

中奥の祖とゝ大雲説経ゝゝゝくハ加賀掾と云しを

の掾ゝ法摘ゝ及ひ義ゝ支後銑後とゝ考也甚未

流ゝもの率章の立支仁骨藤敵ゝくゝゝも和ゝと流

茶を失ハさるゝの掲焉あゝゝゝこのや

一芭蕉翁銑中行藤ゝふゝ見ゝ芭蕉翁乃骨ゝとゝ

て義をゝりてなゝを藤失ひ芭蕉の正道藤有て乃を

蕉利を得る事ハ適て才カ有ん連中も芭蕉風
をかやしのものとおもひ匠おもくして色非なき境
也蕉翁今茅らたゝみつゝ度を失ひ分死長し

才十三　犢鼻（トクビ）褌（シン）を贈る辭

北敷山の兄ハ久しく里帰りして帰られ老
師乃ちゝより七日編（シヽ）六尺ハ手ハ贈ることて
ちゝ出しを里へさ寄へ犢鼻（トクビ）褌（シン）を

日枝（ヒエ）よりおゝ訪ハ流乃ちゝ糸
と泳く撚乃細布を贈りるとて。元禄ゝる思
ひ会を忘かし日のなハ中ハ中ハ信濃をとくりのてる

（見ノ夏良選詞えへタリ）

（犢鼻褌フントシ）

さと悟

國民の常なり詩ふ思くトハ白キとちゝ有ハし
世以ちるところを。羹（シウ）子おろそゝ。惜哉文花
の一系。文也を破るの徒ありん加。ゝれ包こと
ゝてめくゝそく法用ひゝて。貴人ハ二ハ二ハ
めんハ蔡を出ハと國俗ハ出ハ出ハ。さとれ詩
のはしをむすびたるゝ

才十四　陸奥旅宿へ贈る文

吟哀昂偉ゝ意キ水て伝ゝ。ハ有。ハ会ゝ巡
ゝて今紹ゝ風有ゝ
京洛ふ芭ふ拾ひ芭ふ雅俗よいゝ。乃なく嚴潔

白酒初熟　山中幽居　李白

ふまんとて。閑上陳おく草庵のもろ酒熟ぬるふ
間おく。支度はしてけるの玉年わすれ。大和流
やたを張るく皇都を出るく。とりより武陽ふ
ゆるのこゝもとをふをあはれ事遠しこゝ人
はんあるこゝろのわりむ寺。楽りはひうくゝ秋雨
もゝつゝれ。特く暮て今夜をひけぬ誰ともあ
めまたとかの乃忠の事ぬもうゝみめ乃ゝ紙。紛れ
もひ宝て

声ト よゝと
対する文曲
九

見るくハ脱見る秋日熟し　雑詠
ゝゝくゝあるもの見ぬ事ともあるゝ乃裏ア進ゝて氣

必ゝ見合ゝくゝゝて事ゝ

九月廿七日

ゝ　ゝゝ事ハ格八ゝあく格八
実体ふハ格くまるハ入ゝ
てゝゝ

廿十五　紀陽分樹亭ゝ於ふ

本清ゝ
王右軍ノ法
分樹繁手
故爰ニ招ク
仍爰句ニ
換新ノ心有

分樹本清眞手ゝ有ゝに年有り紀陽の句乃乃
我紀る紀ゝ日爰ゝ於ふ愛ゝもゝく於るもな
紀小屋のゝ事乃俤ゝを写み雨を合む。北ゝ来
まゝ風の白ハ分　見恩有見恩ゝよゝも事

ワらの浦ハ
多くの人の
手乃ほ中
ゆもへふも
葉ばうく
ら
後九条殿
乃歌

あるようおのほうう庶人の意しれ吹来りて四時
絶えなくぞ聞をうくワらの浦九条殿内府の
ゆもへふもさみさもあひしおほくの人れ学の海と葉陰く
葉陰うく
ものあふあるしれこのあ浦あるして竹をなとし
新家を掬して生涯を下なる如風流節を言て

スヤハテワガロ
乃吾庵
老杜カ句

ゆるをしらぬ乃吾庵としてまだ臨なうえさあて八
新をる紅葉の秋ハなし未て乃輝

才十六　竿秋をとるるまるる
鄙の家住ふ世の一姿ハ蓮葉藜杖をとうこう
一旅立書れ名おへ〻ぞ梧の黄きちうき

竿ミ名
亀ミ伝表氏
二ほ々あり
家の風新ノ
定〻
基後ノを
ちふ古紀ヲ
ちん

やうに。香稲庵竿秋ハ初紀師ハ和奇ようしれよ
ミ〻山一ち出ちあむむ一ハ出ち出ち亀の袋
と号けきあ古沢陀を通る見ハ去見研ちすやうあ
居士ハ古俗の中山おくれ細乃六つを張し半る
ものく。松浦の郷を院ハ象住後浦ちし立れ磯乃
者二の谷れ夕阿妹資山の嘆。背今ハむ去ハ
てうれよおとし浦きれ途なうんとーあくさあ
作る

京へ彼て参奏芭丑ハれの鄙
岩享保十六年春三月下旬空きうく山

第十七　病臥并蜆売賣

発句文選風羅ノ抜

雖風ハ庶人の風なり。怒濤ハ松栢の下を薙ひ来る。
伐林莽を梢新し。竹を吹切り。沖を割る笘(タカムラ)を含て自然と飄ふ。笹ハ乱れ
切り立て。切口刎ねを含て自然と飄ふ。笹ハ乱れ
岩打波ハ砕て。借地ハ遠くとゝまり深き
雪ハとゞまるのみあり。或ハ殷々たるひ絃ハ聞き
風雪ハ砕るへきやう形。清く冷く霧巷ハ砕
へきやうのおし。似た原ハ人のあるを。広ハ六四十余りの
大男。清涼ハ来ハ髮ハ乱てはくれ汐をはく広

左八八
帆賣ル

蕉翁ハ日の五ツの時を芭蕉庵の門外を過る。蕉
梁蕉ノ古事　翁この子乳(ホ)ゝ彩く話蕉を乞し

ちくわ工　大ぶり　擂てさかくも
別も　おはきか　ふくと　別と

余ハ余ハ余くあり。根ハ大青翁ハ六ハ蕉ハ
の一ツ。あとくと字くよ生ハ
一升ハ幸ハ海ハ赤ゝ取り
蕉子飢ハの一日一升一生ハ
ハ苦ハ余ハ。ハ。蕉ひ儻ハ世ハ
ハ波も拙く。こハ子ハ衰ハ広八歳八六十

又六郎の教えへワを捨て若このちごひよ程、幸
行ちも也も静り行キ消へるさ所へ夕朝夕の庭こ大
王の風もしさく誘あくハ陋窓よ吹来て病を無し
鞋を寧よ。日の日ハ日も多しに至しに秋よそ
有き所。力ハ女蝦肖あれみこぞ。おく喝蹟とん
市く市とも愁よ死せ幸ハて長月もいね発ア。
も絶く形く市り

大王ノ風又宋玉カ言ヒ

カ女ハ蝦肖ちき みくを 俗ラ不

擬ぬ鬼 ハ ぬ 髮 小キ うも

鄭殷伝 俗ラ不

ハ も なんで形ちあんもれちめ片隅よの市り

と拵こ所。さやてちなる石に形ちまて一杭一栢玉の蔓小

百川朝水ハ 俳ノ居士名一ナリ比藤寺 扑道禅師参ス

元文五季秋下

淡々百川朝水居士木槿窟小記之

才十八冨天よ殆る示教

ハ々絶長刀　和歌ハ刀　是奇を拡美　詠詩を

相思ハ人へて絶刀を利遠くん れとをするや絶た

寫氏カ飯 お伝公を殺一棧よく徇を定めハ日ん時ハ月を て冨て功ハ寫氏

左傳ニ出 荊軻カ事ク館ア て怖ロを殺一荊軻を始皇ハ殺を

史記

寄ンを此時絶長刀ハ長刀ハ さ一なを例へる事

ちる面一絶刀を図ア市を た主ん こ所一ンを ちる

ハなンを此時秦王の佩る劔ハ長きよ た

ちよ按事ゆゑ夏無且ら某嚢なくて別
紙ゑへ一巻たとて教ゆ事を恐るゝの心。能ク清
如き心を定めゆ日を藝道何ソ伝ゆ事を云ふ所し
唯見性一ツ年甚的確指ゑへ一あゝ用ゆ全
流儀ハ昇俗ゆ高ゆ津はやし嗜て言記ふん
を要て神代の教へ儒朝の道を兼ねむへ記ル
ゆ事れて中興流道ゆ祖花咲社ゆ貞徳李吟
芭蕉ゆ其角引下て洒落ゆ道統ゆ時今流
日今世俳。押ゆを業を行ふ悲極并教授ゆ
舊例式新古式及廛貶ゆ舎拙ゆ三ツ物

撰集並ニ古式ゆ舎未ゆ書く教ゆ上古能ゆ慎ゆ
古ゆ遠意ゆ事日ゆ他門ゆより正統有へ一不
知ゆ古ふ俳ゆ元余ゆ程を教ゆなゆ八。句ゆ執行
ゆ外を有日姿ゆ序跋并撰者ゆ事記
日ゆ記れゆ日く不文ゆ高志ゆ文章ゆ事日
挑ゆ句ゆ一句稿ゆ稿ゆ拙ゆ芦ゆ穂水ゆ如
生ゆ句神尾花ゆ書ゆ芦ゆ毎ゆ
うゝ松ゆ竿秋ゆ元領を流ゆ時を文ゆ表
ゆ雨ゆ芦ゆ仰ゆ拙芦ゆ稿を芦ゆ芦ゆ
稿と作ゆ記ゆ拙ゆ也言ゆ八。未ゆを以と

A.N.B.

そもそもこれ一通乃清嘯梅吸各長文筆
姓のところをこゝみ出るうゝ書てかゝや
業へたまへ

東尾

清文集卷第一終